第67回（2023年度）　北海道開発技術研究発表会論文

地域のにぎわいに資する河川管理施設の運営について
―十勝川インフォメーションセンターの再オープンを事例に―

帯広開発建設部　帯広河川事務所　計画課　　○富永　真弘
大野　智樹
尾﨑　光政

十勝川インフォメーションセンターは、水位流量観測施設としての機能に加え十勝川の情報を発信する施設としてこれまで多くの市民に親しまれてきたが、施設の老朽化が進んでいた。そこで十勝川治水100年の節目にあわせて今年度再オープンを行い、施設の改修だけでなく観光交流・防災活動機能を付加した上で民間の知恵を活かした管理・運営制度を適用するなど、さらなる施設の充実を図った。本稿はその内容を報告するものである。

キーワード：再オープン、観光交流、防災活動、アダプトプログラム

1. はじめに

十勝川インフォメーションセンター（以降、TICと表記する）は、帯広市の十勝川沿いに位置する帯広開発建設部帯広河川事務所が所管する河川管理施設である（**写真-1**）。水位流量観測施設であると同時に、十勝川の自然や治水について学ぶことができる学習交流施設としてこれまで多くの市民に利用され、親しまれてきたが、オープンからおよそ30年が経ち、施設の老朽化が顕著になり、令和2年から蔓延した新型コロナウイルスの影響も相まって、近年は閉館していた。

TICは帯広市中心部と十勝川が隣接する場所に位置しており、一帯は河川を活用した地域づくりのポテンシャルを有していた。また、令和5年は、十勝川の本格的な治水が大正12年に始まってからちょうど100年という節目の年であり、先人たちによる治水のあゆみを振り返るとともに十勝川流域のさらなる発展と防災意識の向上にむけて、各種記念事業を展開した。そこで、その一環として、TICを中心とした河川空間のさらなるにぎわいを創出すべく、施設の更新とあわせ、機能のさらなる拡充を図った。

施設の更新にあたっては、これまでの学習交流施設としての機能を継承しつつ、これまで以上に地域のにぎわいに資する施設とするべく、情報発信・活動交流・観光交流・防災拠点としての機能を付加・拡充することで、施設の充実を図った。また、再オープン前より展開していたアダプトプログラムを引き続き適用し、民間のノウハウを活かした施設の管理・運営を目指した。

本稿では、地域のにぎわいに資するTICの再オープンの内容について、報告するものとする。

写真-1 TICの外観

図-1 TICの位置図

TOMINAGA Masahiro, OONO Tomoki, OZAKI Mitsumasa

2. 十勝川インフォメーションセンターの概要

(1) 位置と周辺環境

図-1に、TICおよび周辺の主要な施設の位置図を示す。TICは、帯広市役所や帯広駅が集まる市内中心部にほど近い場所にあり、十勝川沿い右岸に位置している。いくつかの指定区域やルートの中に位置するなど、さらなる活用の可能性が揃っていることが特徴である。それぞれ、以下に紹介する。

a) 帯広市かわまちづくり事業

TICは、帯広市かわまちづくり事業の区域内に位置している。帯広市かわまちづくり事業は、帯広市の新総合体育館の改築整備と連携してスポーツを軸とした地域活性化を図るため、帯広市により申請されたもので、平成30年3月に登録された。付近の河川敷一帯は、帯広市により緑地公園やパークゴルフ場、野球場やサッカー場といった運動公園が整備されており、これらとの相乗効果を図るため、かわまちづくり事業では不連続となっているサイクリングロードの整備や、川辺へのアクセス性の向上にむけた河川敷整備等を行っている。帯広市が掲げる健康スポーツ都市としての更なる推進や、河川に隣接する市街地の地域活性化の促進を図っている。この区域内に位置していることを活かし、TICを河川空間の活性化にむけた拠点の一つとして整備することで、さらなるにぎわい創出に貢献することが期待できる。

b) 都市・地域再生等利用区域

帯広市かわまちづくり事業のソフト面での施策の一つとして、TICを含む十勝川右岸の河川敷地等が令和元年9月に都市・地域再生等利用区域にも指定されたことも特徴である。都市・地域再生等利用区域とは、地元自治体からの要望を契機に、都市及び地域の再生及び地域活性化に資する川を活かしたまちづくりを目的として河川管理者が指定できる区域である。具体的な指定範囲を図-2に示す。先述の通り、区域一帯の緑地公園や運動公園が若者から高齢者まで幅広く日常的に使われる場となっていることから、河川のさらなる利活用を目指して、帯広市による要望のもと指定された。これにより、これまで限定的だった河川の利活用が緩和され、営利活動を含む民間事業者等による河川敷地の利用が可能となる。すなわち、TICを拠点として営利活動も含む様々なイベントの開催等を図ることができ、先述のかわまちづくり事業と絡めてより一層の河川空間の活性化を期待できる。

c) ナショナルサイクルルート「トカプチ400」

さらに、図-2に示すように、自転車を活用した観光地域づくりを目的として国土交通省が指定しているナショナルサイクルルートの一つ「トカプチ400」のルート上にTICが立地しているのもポイントである。トカプチ400とは、帯広市を中心として、北十勝と南十勝を8の字に結ぶ延長403kmのサイクルルートで、北海道では初めて指定されたルートである。国土交通省は、ナショナルサイクルルートの指定要件の一つとして「サイクルステーションがルート上におおむね20kmごとに整備されていること」[1]と規定しており、TICの立地条件を活かし、サイクルステーションへの登録により、当館をサイクリストが気軽に休憩に立ち寄る施設とすることができる。

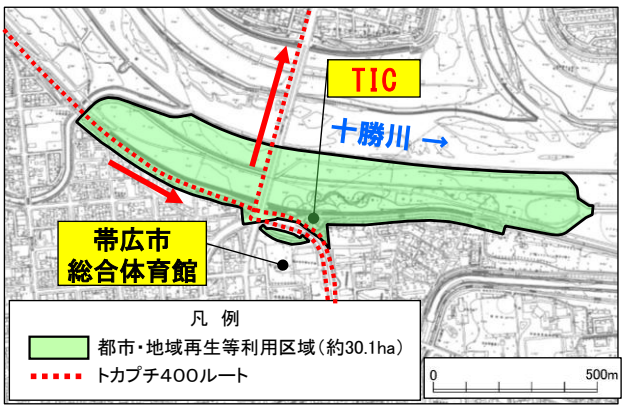

図-2 都市・地域再生等利用区域とトカプチ 400 ルート

d) 目の前を十勝川が流れるロケーション

TICは目の前を十勝川が流れるロケーションにあり、当館から川の眺望や景観が楽しめる。また、付近では桜並木も整備されており、景観にも優れた立地条件にある。加えて、TIC周辺では、普段から堤防上を散歩したりジョギングを楽しむ市民の姿が多く見られるほか、時にスポーツの大会や大規模な花火大会など多目的にイベントが開催され、多くの市民で賑わう。

以上のように、様々な区域やルート内に位置している立地条件に加えて、川のすぐそばにあり、眺望や景観に優れていること、普段から市民で賑わう場所に位置していることなど、さらなる活用の可能性を有しているのがTICの特徴である。

(2) 沿革

TICは当初、十勝川の流下能力確保にむけ河川幅を拡幅するにあたり架け替え工事を行った十勝大橋の情報提供施設として平成5年にオープンした。架け替え工事完了後、施設はそのまま存置され、平成10年より現在に至るまで、河川管理施設と同時に河川について学べる学習交流施設として整備され、帯広河川事務所が管理している。十勝川に関する様々な活

動の紹介や河川利用者の休憩等に利用されてきており、入館者数は年間平均約4,000人で、多い年で7,000～8,000人に利用されていた。

TICの管理・運営にあたっては、平成21年より、アダプトプログラムの試行を開始している。アダプトプログラムとは、行政のサポートのもと、公共施設等の維持管理を地域住民や企業によって行う取組であり、公共施設等を「養子」、市民や企業を「里親」と見立てたいわゆる「養子縁組」の制度である。平成26年より、公募ののち「公益財団法人日本野鳥の会十勝支部」とアダプトプログラム締結を同意（以降、締結相手をアダプト締結団体と表記する）し、施設の清掃や保管物の管理、来館者対応等の管理・運営を担当させていた。また、アダプト締結団体だけでなく、地域団体による活動の拠点としても活用され、さけや野鳥など十勝の自然環境を継承することを目的に、広報活動や体験活動が実施されていた。

ところが、建築後30年近く経ち、施設の老朽化が顕著となっていた。令和2年から始まった新型コロナウイルスの蔓延もあり、令和4年3月より休館していた。

(3) 施設の概要とこれまでの展示内容

TIC は、木造3階建て構造の建物である。図-3に、再オープン前の各階のフロアマップを示す。1階には受付、トイレ、観測計器室、大型水槽等が設置されていた。特に大型水槽については、地域のボランティア活動として、水槽を使ってサケの産卵から稚魚飼育、放流までを市民が体験できる取組も行われていた。2階は交流スペースとして、学習机や椅子が用意されたり、レクチャー室が整備されていた。3階は、十勝川を一望できる眺望を活かし、展望スペースとして整備されていた。

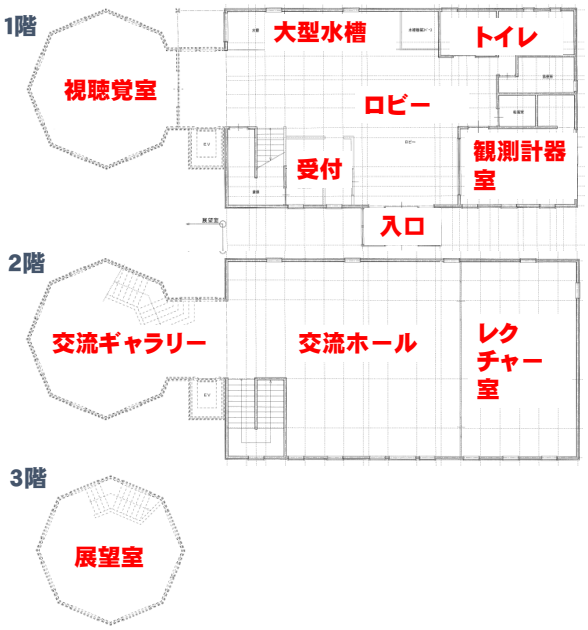

図-3　TICのフロアマップ(再オープン前)

表-1　各階の整備内容ほか

階	内容	機能
1階	パネル展示（サケ、治水事業、防災など）	情報発信/防災
	十勝河畔の鉱物・昆虫標本展示	情報発信
	映像コーナー	〃
	デジタルコーナー	〃
	ととろーど映像配信	〃
	十勝大橋資料展示	〃
	はく製展示	〃
	ツアーデスク	情報発信/観光交流
	サイクルラック	観光交流
	憩いのスペース	〃
2階	交流スペース	活動交流
	学習スペース	〃
3階	床面航空写真パネル	情報発信/観光交流
	固定型双眼鏡	観光交流
その他	サイクルステーションへの登録	観光交流
	アダプトプログラムを活用したイベント等の実施	活動交流/観光交流

3. 再オープンにあたってのコンセプト

再オープンにあたっては、これまで以上に地域のにぎわいに資する施設とすることをねらいとし、既存の機能の拡充に加えて新たな機能も追加する形で施設を更新し、さらなる充実を図った。以下、それぞれの機能の観点による施設のコンセプトについて述べる。

(1) 十勝の地域・自然環境を知る情報発信拠点として

十勝の地理をはじめ、サケや野鳥などの自然環境について学ぶことができる情報発信拠点として整備する。これまでの展示内容を継承しつつ、展示情報の変化に柔軟に対応できるようデジタル技術も駆使した新たな展示物についても検討する。

(2) 十勝川の防災拠点として

十勝川の自然や地理だけでなく、治水事業や防災などについても学ぶことができる施設として整備し、学校の校外学習等に活用される拠点づくりを行う。また、洪水時の河川管理施設の保全、復旧活動を行う拠点として機能することとし、水防活動時の水防団待機場所等としての活用を目指す。

⑶ 河川空間のにぎわいを創出する活動交流拠点として

再オープン前に引き続き、子供たちの学びの場、および河川協力団体を含む地域団体の活動・交流の拠点として整備する。2階にオープンスペースを設け、椅子や机を並べた学習スペースや、多目的に使用可能な交流スペースを確保する。また、アダプトプログラムを活用し、営利活動も含めたイベントや講習会、ワークショップ等の開催を図り、地域や河川空間のにぎわい創出に資する拠点とする。

⑷ 十勝の観光振興に資する観光交流拠点として

トカプチ400のサイクルステーションへの登録をはじめ、TICをサイクリストが気軽に立ち寄ることができる施設とするための整備を目指す。また、サイクリストのみならず、ジョギング、散歩等、十勝川を利用する人が立ち寄り、憩えるスペースとする。さらに、ツアーデスクを設け、十勝の観光情報の提供を行う拠点づくりも目指す。

4. 再オープンの内容

３を踏まえ、表-1のように、ハード・ソフト両面から施設の内容を更新した。

⑴ 1階

十勝の自然や治水事業、防災等について学ぶことができる展示スペース（写真-2）、市民やサイクリストが立ち寄った際に休憩できる憩いのスペース（写真-3）、十勝の観光に資する情報提供可能なツアーデスクとして機能する受付（写真-3）等として整備した。具体的な展示の内容について、主要なものを下記の通り解説する。

- パネル展示

  展示スペースの壁面に、サケをはじめとした十勝川の自然、治水事業のあゆみ、防災事業の概要などに関するパネルを10枚ほど設置した。パネルは企画展や季節にあわせ、臨機応変に張り替えることが可能である。

- 十勝河畔の鉱物・昆虫標本展示（写真-4）

  十勝の河畔で見られる岩石・鉱物の実物や昆虫の標本を展示した。それぞれ採取できる河川等についての情報も追記している。なお、これらはひがし大雪自然館よりご提供いただいたものである。

- 映像コーナー（写真-4）

  十勝川の防災や環境、観光に関する映像コンテンツの発信を行うコーナーである。通常時は十勝川の自然や治水事業、観光情報等に関する解説動画やプロモーションビデオを再生している（現在は「かわたびほっかいどう」PVや、十勝川治水事業100年記念ビデオを放映）。また、スクリーンを活用して映像コーナーでのイベントやミーティングの開催等も可能である。

- デジタルコーナー（写真-5）

  QRコードを読み込むことで、来館者が手持ちのスマートフォンで閲覧できるデジタルコンテンツを新たに作成し展示した。一つは、VRにより十勝川流域のツアーを擬似的に体験できる「河川バーチャル見学」、もう一つは、十勝の川の生き物の図鑑をスマートフォンで閲覧できる「デジタル図鑑」である。手でスワイプすることで、バー

写真-2　1階展示スペース

写真-3　受付（左）と憩いのスペース（右）

写真-4　昆虫標本展示（左）と映像コーナー（右）

写真-5 デジタルコーナー（左）とととろーど配信（右）

チャル画面や図鑑を自在に閲覧することができる。

- ととろーど映像配信（**写真-5**）

　十勝川中流部千代田地区にある魚道観察施設「ととろーど」のライブ映像を配信するためのテレビ画面を新たに設置した。毎年春～秋にかけて、サケやサクラマスが川を遡上する様子をリアルタイムで見ることができる。

⑵ 2階

アダプト締結団体が多目的に活動を展開できる階とし、市民を対象とした様々な催し等を開催したり子どもたちが学習する場として活用できるよう、オープンスペースを確保した。

- 交流スペース（**写真-6**）

　再オープン前よりレクチャー室として整備されていた部屋を拡張し、オープンスペースを確保した。椅子や机を並べて会議室として使えるほか、アダプト締結団体の工夫で様々な体験教室等の開催場所としても使用できる。現在は、一般の市民でも申し込みにより自由に活用できるようにしている。

- 学習スペース

　子どもたちの自習スペースとして活用できるよう、椅子や学習机を設置するためのスペースを確保した。

⑶ 3階

眼前に広がる十勝川の眺望を活かして、再オープン前に引き続き展望スペースとして整備した（**写真-7**）。従来に引き続き、河畔に生息する野鳥を観察するための固定式双眼鏡や、十勝の床面航空写真パネルを設置した。なおパネルには、河川名のほか、道の駅やトカプチ400のルートなど、観光振興に資する情報も入れている。窓からのぞむ景観とあわせて、十勝の地理を体感できる。

⑷ その他

- サイクルステーションへの登録（**写真-8**）

　当館をトカプチ400のサイクルステーションとして登録し、サイクルラックの設置や、自転車修理のための補修キット（空気入れ、ペンチ、六角レンチなどの工具）の常備を行った。休憩の場としてだけでなく、自転車の応急修理も可能な施設として、サイクリストによる利用が期待できる。

- アダプトプログラムを活用したイベント等の実施

写真-6　2階交流スペース

写真-7　3階展望スペース

写真-8　サイクルステーションとしての整備

　再オープンにあたり、従来よりも充実したアダプトプログラムの締結を行った。具体的には、締結対象団体について、これまでは「公益法人、又はその他それらに準ずる者」としてきたが、再オープンより、上記に加えて民間事業者も対象へ加えた。これは、民間事業者のノウハウを活用し、TICを拠点とした下記のようなイベント開催等の活動を期待したためである。

・隣接する河川敷の緑地公園を活動フィールドとして、年に2回以上はイベントを実施する。

・河川を中心とした観光等案内施設として、自らもその活動を実施する。

・トカプチ400のサイクルステーションとして、サポート支援を実施する。

・利用者から申し出があった場合は、施設

内の交流スペースを多目的スペースとして開放する。

公募を通じて、令和5年4月より、共同企業体「リバーベース十勝川」（代表企業：株式会社オカモト）とのアダプトプログラム締結を行った。従来のアダプト締結団体と比べて、よりイベント等の開催に精通している民間事業者と締結したことで、TICを拠点とした活動の実施をはじめソフト面でのこれまで以上の充実が期待できる。

5. 再オープン後現在

令和5年10月14日に、再オープンイベントを開催した。イベントでは、くす玉開披（**写真-9**）、館内の内覧会（**写真-10**）、およびアダプト締結団体所属のアーティストによるミニライブを開催した。市民や関係者およそ30名が集まり、TICの再オープンを祝った。

セレモニー終了後から正式に再オープンした。再オープン後は、家族連れや散歩中の市民が当館に立ち寄る様子が見られ、更新された館内や新しい展示物に興味を示している様子が見られている。また、2階の交流スペースは、河川協力団体の会議といった外部団体によるイベントをはじめ、かわたび協議会の活動報告会や各種研修などの場としてこれまでに3,4回ほど使用されている。

営業時間は、アダプト締結団体の提案に則り、夏期期間は火曜日～日曜日、冬期期間（11月～3月）は月曜日のみの開館としている。営業時間は9時から17時までである。また2階の交流スペースは、現在は申し込みにより誰もが無料で会議等に使用できることとなっている（詳細は帯広開発建設部のホームページを参照）。

再オープンして間もなく冬期期間に入ったため、開館日数が限定的であるのが課題だが、来年度以降のより一層の活用に向けて、まずは再オープンしたTICを市民に広く知ってもらうことを目標に、帯広市やアダプト締結団体と連携しながら情報発信・イベント開催等に努めていく予定である。

写真-9 くす玉開披（再オープンイベントにて）

写真-10 内覧会の様子（再オープンイベントにて）

6. おわりに

様々な立地条件を活かしながら、地域のにぎわい創出に資する河川管理施設の整備の先駆的一例として、各地での取組の参考になれば幸いである。

謝辞：当館の展示物として、岩石・鉱物および昆虫標本をご提供いただきましたひがし大雪自然館に厚く感謝申し上げます。

参考文献

1) 国土交通省：トカプチ400, https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/national_cycle_route/tokapuchi.html, 2024年1月4日閲覧